ポスター発表Ｐ③

看護系大学１年生に実施した 高齢者ふれあい実習の初年度における効果と課題 ―学生の授業評価より―

安原由子，關戸啓子
（徳島大学大学院ヘルスバイオサイエンス研究部）

１．はじめに

2011 年度入学生から，看護学専攻ではカリキュラムが一部変更になり，新たに１年生に対して「高齢者ふれあい実習」が開講された。これは，夏季集中で１週間，高齢者が利用する福祉施設で行う実習である。福祉施設では，学生を一度に受け入れてもらうことが難しく，８月末から９月末にかけて，複数のグループで別々の時期に１週間ずつ実習を行った。この期間には，「基礎看護学実習Ｉ」という，病棟で１週間，学生全員が一斉に行う集中実習がある。そのため，学生によって，「高齢者ふれあい実習」のあとで「基礎看護学実習Ｉ」を経験した者と，「基礎看護学実習Ｉ」のあとで「高齢者ふれあい実習」を経験した者にわかれた。「高齢者ふれあい実習」はコミュニケーション能力向上と，対象者に援助的に関わることを主な目的として，高齢者と実際に関わり簡単な援助は実践する。一方，「基礎看護学実習Ｉ」は見学実習で患者に対して実際に援助を行うことはほとんどない。

今回，「高齢者ふれあい実習」ははじめての実施であり，さらに「基礎看護学実習Ｉ」との関連もあり，その効果と課題について明らかにすることを目的に授業評価を実施した。

２．「高齢者ふれあい実習」の概要

1）実習目的

医療福祉施設における職員の活動状況を見学することや，高齢者に接することによって，高齢者の生活を理解し，高齢者に生じている日常生活援助のニーズを知る。

また，高齢者に対する接し方や，コミュニケーションの取り方を体験的に学ぶ。

2）実習目標

(1) 実習にふさわしい態度で自主的に実習に取り組むことができる。
(2) 高齢者に対する施設の役割の概要が述べられる。
(3) 高齢者に対する職員の役割の概要が述べられる。
(4) 高齢者に必要な援助方法の概要が述べられる。
(5) 高齢者の生活上の援助に対するニーズについて述べられる。
(6) 高齢者と良好なコミュニケーションを取ることができる。

3）単位，時間数，実習期間

１単位，45 時間，１週間の集中実習

4）実習学生

開講学年は看護学専攻１年生（必修）

5）実習方法と日程

５～10 人程度のグループに分かれて，「基礎看護学実習Ｉ」より前の時期（前半グループという）に，３施設で３グループ，23 人が実習を行った。「基礎看護学実習Ｉ」より後の時期（後半グループという）に，３施設で６グループ，46 人が実習を行った。実習先では，実習施設の日課に従って，職員とともに，または職員の指示に従って高齢者に接する。

１日目：実習のオリエンテーション
２～４日目：現場実習
５日目：実習のまとめと反省，全体発表会

6）実習記録と評価方法

現場実習中は，「毎日の記録」を１日に１枚書いて提出する。評価は実習目標の到達度等をみて，実習担当教員が行う。

３．「高齢者ふれあい実習」の工夫点

看護技術を学習していない学生が実習を行うため，実習施設はなるべく要介護度が高くない高齢者が利用する施設を選定し，施設職員とともに行動させてもらえるように，事前の打ち合わせを綿密に行っている。学生の実習時期については，前期に学生に希望調査を行い，学生の希望に合うように調整している。さらに，前期の間に数回，事前のオリエンテーションを実施して，実習準備を十分に行っている。

４．「高齢者ふれあい実習」の授業評価（調査方法と結果）

「高齢者ふれあい実習」の効果と課題を明らかにするため，学生全員が実習を終了した 2011 年 10 月に無記名の授業評価を実施した。学生に，研究の趣旨・協力は自由意思であること・協力の有無は成績とは無関係であること・プライバシーは守られること・研究結果は発表されることを説明した。その上で，研究協力に同意する学生は，研究協力同意欄に○を付けて提出するように依頼した。授業評価は実習した学生 69 人全員が提出した。そのうち 66 人の学生から，研究への同意が得られた。

授業評価は，実習目標ごとに「達成できた」から「達成できなかった」までの５段階で回答を求め，「達成できた」から順に５～１点を配して得点化した。結果は表１に示すとおりであった。

５．考察

前半グループと後半グループの実習目標達成度を比較したところ，全ての目標において有意差はなかった。目標達成に実習時期は影響していないと考えられた。実習目標の達成度の平均値は，全て４点前後であり，目標設定は適切であると思われる。達成できにくい学生が多かったのは，高齢者とのコミュニケーションであった。ふだん，高齢者と話す機会の少ない学生には，難しかったようである。高齢者とのコミュニケーションについては，実習時教員が話すきっかけを作るなど，サポートが必要であることがわかった。また，事前に高齢者とのコミュニケーションについては，学内で演習を行うなど，工夫が必要であることが示唆された。

６．まとめ

本年度はじめて実施した「高齢者ふれあい実習」であるが，授業評価結果からは，実習目標を学生はほぼ達成できており，実習効果は大きいことがわかった。そのなかで，学生が苦手とするのは，高齢者とのコミュニケーションであった。これについては，今後の課題として，事前学習や指導の工夫などが必要であることが示唆された。

表１　実習の時期別，授業評価の結果

	実習時期	達成できた	ほぼ達成できた	やや達成できた	あまり達成できなかった	達成できなかった	平均得点±標準偏差	P 値
実習にふさわしい態度で自主的に実習に取り組めた。	前半	12(54.5)	10(45.5)	0	0	0	4.55±0.51	0.099
	後半	18(40.9)	17(38.6)	9(20.5)	0	0	4.21±0.77	
高齢者に対する施設の役割の概要がわかった。	前半	9(40.9)	13(59.1)	0	0	0	4.41±0.50	0.915
	後半	21(47.7)	19(43.2)	4(9.1)	0	0	4.39±0.66	
高齢者に対する職員の役割の概要がわかった。	前半	11(50.0)	9(40.9)	2(9.1)	0	0	4.41±0.67	0.323
	後半	17(38.6)	20(45.5)	7(15.9)	0	0	4.23±0.71	
高齢者に必要な援助方法の概要がわかった。	前半	6(27.3)	10(45.5)	6(27.3)	0	0	4.00±0.76	0.427
	後半	8(18.2)	22(50.0)	12(27.3)	2(4.5)	0	3.82±0.79	
高齢者の生活上の援助に対するニーズがわかった。	前半	10(45.5)	7(31.8)	5(22.7)	0	0	4.23±0.81	0.293
	後半	9(20.5)	29(65.9)	6(13.6)	0	0	4.07±0.59	
高齢者と良好なコミュニケーションがとれた。	前半	7(31.8)	8(36.4)	5(22.7)	1(4.5)	1(4.5)	3.86±1.08	0.943
	後半	14(31.8)	16(36.4)	11(25.0)	3(6.8)	0	3.93±0.93	

注）実習時期の前半：n=22，後半：n=44　（　）内は％　　Wilcoxon の順位和検定